

徳永製菓4月の新作 7月は「塩ソフト豆」発売

豆菓子製造・販売の徳永製菓(福山市胡町四―二一、上迫豊社長)は、7月の新作豆菓子「塩ソフト豆」写真Ⅱの販売を同社直営の豆徳本店などで始めた。

落花生を蒜山ジャーミールクの粉末でコーティング。ほんのりと塩味が効いていて、塩ソフトクリームをイメージした夏の「豆スイーツ」となっている。猛暑が予想される



中、熱中症対策にも役立ちそう。「そのまま食べるのはもちろん、凍らせてもおいしい商品です」と同社。七五割入りで三七八円。

同社は1869年創業。伝統的な豆菓子を中心に、フルーツ味のカラフルな豆やナッツ菓子も製造している。長年培ってきた素材をコーティン

グする技術を活用し、従来にない商品を展開している。

同社は今春、しまなみ海道沿いに位置する生口島(尾道市)の自家用農地にアーモンドやピスタチオなどのナッツの木を植樹。「しまなみナッツファーム」と称して栽培している。▽問 豆徳本店 ☎084・922・2710

夕暮れの灯り

[139]

―カラオケと酒は百薬の長―

今田 昭和(いまだ あきかず)



この物語は日記や記憶をもとに創作し、コミカルタッチで、つづったものである。話は時として飛んだり、ひっくり返るが、ご容赦願いたい。

「半世紀前は繁華街」

「つづいて福山の駅前で今田と飲むのは、いつ以来かのう。Tが言ったので、駆け足で記憶をたどった。

「おまえが新生活を始めるために東京へ行く時だったから、四五年ぶりになる」

「ふうん。帰るたびに二人で一杯やっているのにな。Tが首をかしげたので、「その折は、いつも昭和町か住吉町の店だった」と言ってみてやった。理由は、駅前には好みのスナックがない、ということだ。

前述したが、Tとは同い年で遠い親せきになる。なぜか馬が合い、中学生の頃からよく遊んだ。社会に出てからも連れ立って飲み歩いたが、諸事情で福山と東京に離れて

暮らしている。

昨年の11月某日、Tは三年ぶりに尾道へ帰省。トンボ返りだったが、午後8時台の新幹線に乗る前、一杯やろうと駅に近い大衆酒場「福山バット(伏見町)に入ったのである。「駅前の風景は、むしろが遊んでいた半世紀ほど前と変わったのう。当然か」。Tがグラスから口を離して、つぶやいた。

当時の駅前は、福山市内で最も多くの商業施設が並ぶ一大繁華街だった。ポウリング場や映画館(今もある)、パチンコ店などもそろい、夜はコンパとかパブと呼ばれていた酒場に若者たちが集い、にぎわっていた。



今、「コンパ」という言葉は、新人歓迎会や懇親会などの意味で使われている。が、私たちが若い頃は、「コンパとい

う形式の酒場がはやっていました。簡単にいえば、若者相手のショットバーのようなも

のである。ただショットバーというところ、ごちゃまじりした店を想像されがちだが、コンパの店内は広く、三〇―四〇席はあった。だから「マンモスパブ」とも呼ばれていた。

「悪い悪い、ちょっと長過ぎた」。一杯目のビールを飲み干した時からスマホを耳に当てて、誰かと話していたTが謝った。「この近くに『マンハッタン』とか『スター』といったパブがあったことを覚えていたか」。私が聞くと、「忘れるわけがない」。Tはキツパリ返した。「マンハッタン」は、私たちが飲んでいた「福山バット」の裏の藤本ビルにあった。

つづく